

現地説明会

(財)大阪文化財

センター



池島・福万寺遺跡はタイムマシン

池島・福万寺遺跡は八尾市と東大阪市にまたがる大きな遺跡で、治水緑地の建設にとともに発掘調査がつけられています。これらの発掘調査によっていろいろな時代のようにすがだんだんとあきらかになり、この遺跡の大切さがわかってきました。

弥生時代 (2200年前～1700年前ころ)

弥生時代は日本でも米作りがはじまった時代です。

ここ池島・福万寺遺跡においても、弥生時代をとおして水田が遺跡全体にひろがっています。残念ながらムラのあった場所にははっきりしませんが、さほど遠くないところにムラがあったのでしょうか。

古墳時代 (1700年前～1400年前ころ)

古墳時代は各地で大小さまざまな古墳がつくられた時代です。ここ池島・福万寺遺跡の東にも心合寺山古墳という大きな古墳がつけられています。

この遺跡ではこの時代にはムラがつけられたようで、建物跡のほか、玉などもたくさん出土しています。

このほか、このムラからは煮炊きにつかったカマドがたくさん出土することが非常に特徴的な点だといえます。



奈良・平安時代

(1300年前～800年前ころ)

奈良・平安時代は奈良に平城京、京都に平安京という都がおかれたはやかな時代です。

それにくらべて、池島・福万寺遺跡の周辺にはのどかな田畑がひろがっていたようです。

ただ、この時代には正方形にきちんと区切られた田畑がつけられるようになりました(条里制)。



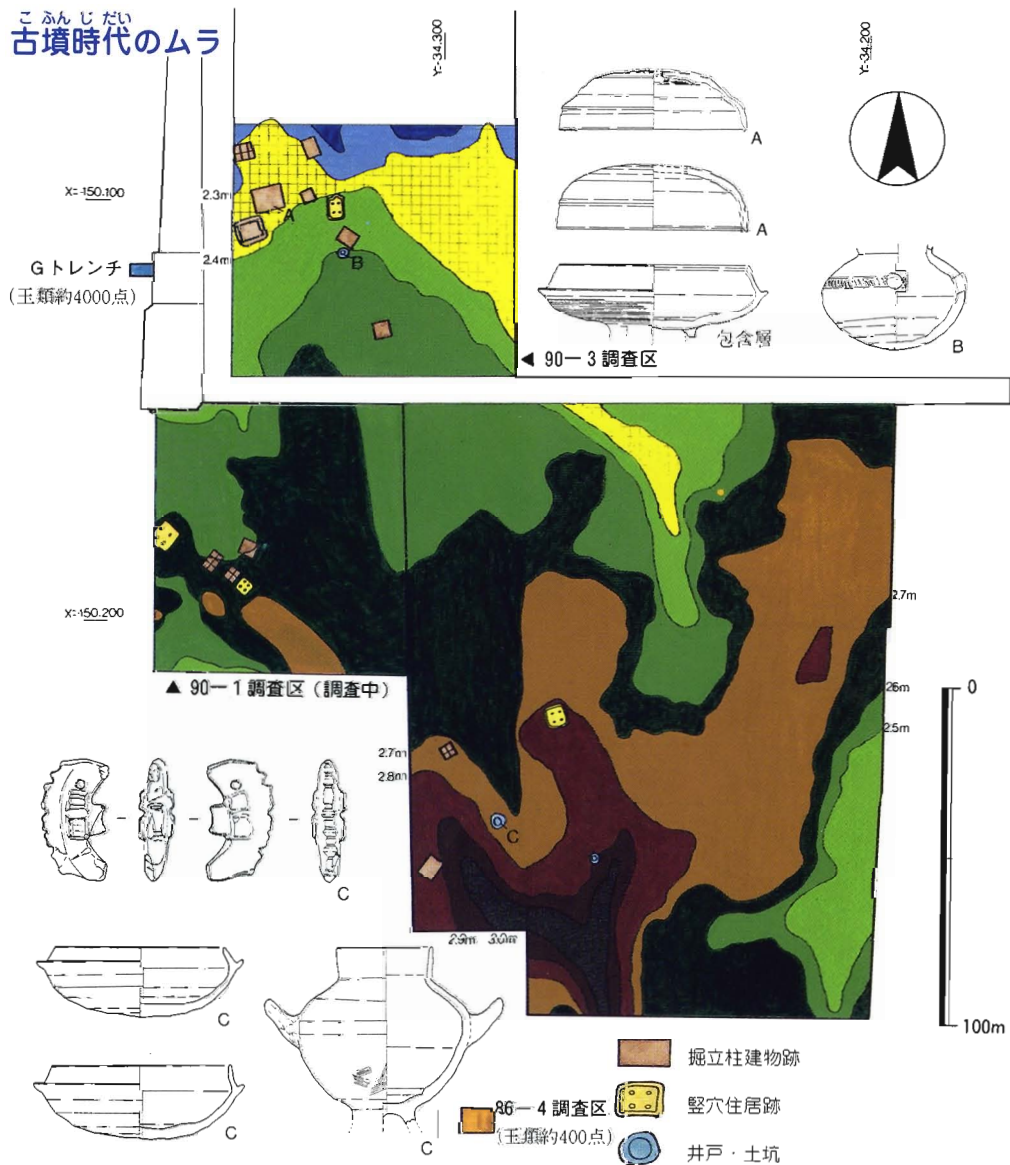
鎌倉時代～現代

鎌倉時代から現代にいたるまで、正方形にくぎられた条里制の地割りをまもりつけ、この遺跡の周辺は田畑として利用されてきました。

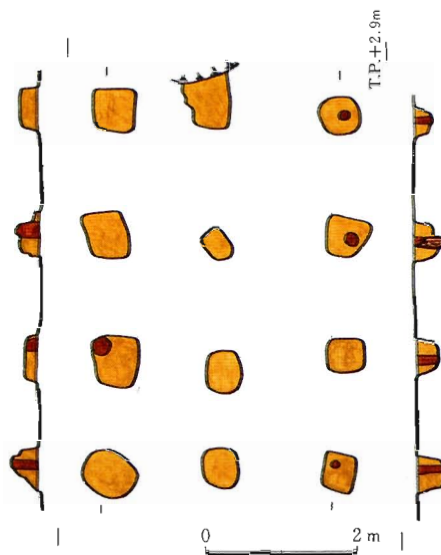
とくにこのあたりでは畑の一部を高くした「島畑」がつけられ、江戸時代にはそこで綿をさかんに栽培し、それをつかって有名な「河内木綿」をつくっていました。

古墳時代のムラからはこれまで16軒の家のあとがみつかっています。これらの家は全部が同じ時に建てられたものではありません。家の中や周りからみつかる土器などを調べると少しずつですが建てられた時が違ってくるのがわかります。それぞれの家は下の図のようにいくつかまとまって建てられています。家が集まっているところには井戸も掘られていてこの場所で飲み水をくんでいたこともわかります。これらの家は地面が少し高くなった所に建てられています。

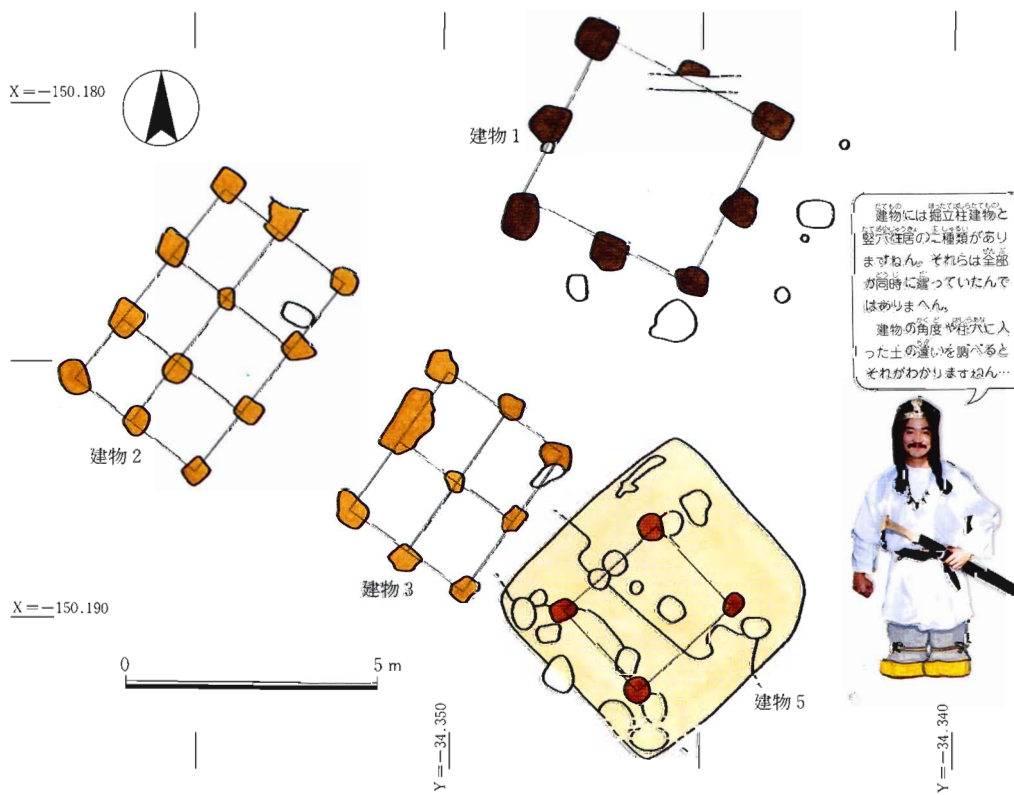
現在調査中の部分では建物がいくつかみつかっていますが、建物2と3は柱の並ぶ方向がほとんど同じな事から同時に建てられたものと考えられます。また建物1や5とは少し時期が違うようです。また建物4は焼けた柱などが炭になって残っていました。



池島・福万寺遺跡（福万寺Ⅰ期）古墳時代遺構平面図（古墳時代—1500年前ころ）

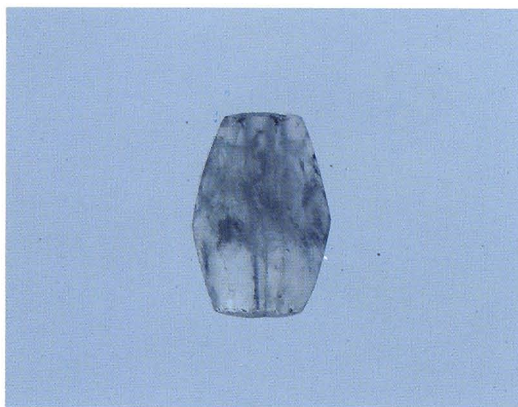


90-1 調査区 建物2 実測図



90-1 調査区 建物群配置図

ムラの中でも人々が生活していた家のまわりからはたくさんのものが出土しました。一番多くでてくるものは土器ですが表紙の絵のような色々な種類のものがみつかっています。とりわけ須恵器の「器台」と呼ばれる土器や土師器の「移動式カマド」は普通のムラからはそれほど出土しないものですが、このムラではたくさん使われていたようで、多くの破片がみつかっています。また須恵器の中には右の写真のように集めて置かれていたものもありました。

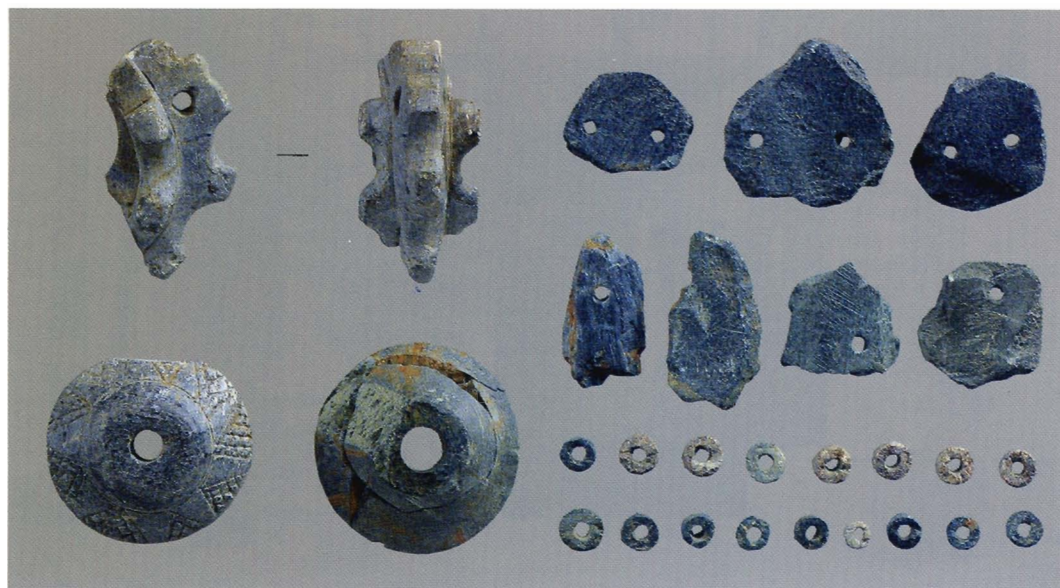


水晶製切子玉

このムラからは土器の他にも下の写真のような滑石という石で作られたものも出てきます。中でも多く出土するものは「白玉」で、これまで4000個以上がみつかっています。また「子持ち勾玉」や「紡錘車」などもみついているほか、うすい板石に穴を1～2か所あけたものもでてきます。写真右上の水晶の玉や「器台」などは古墳から出土するものが多く、このようなムラから出土するのは珍しいといえるでしょう。



90-1 調査区 土器群



90-1 調査区出土 滑石製品



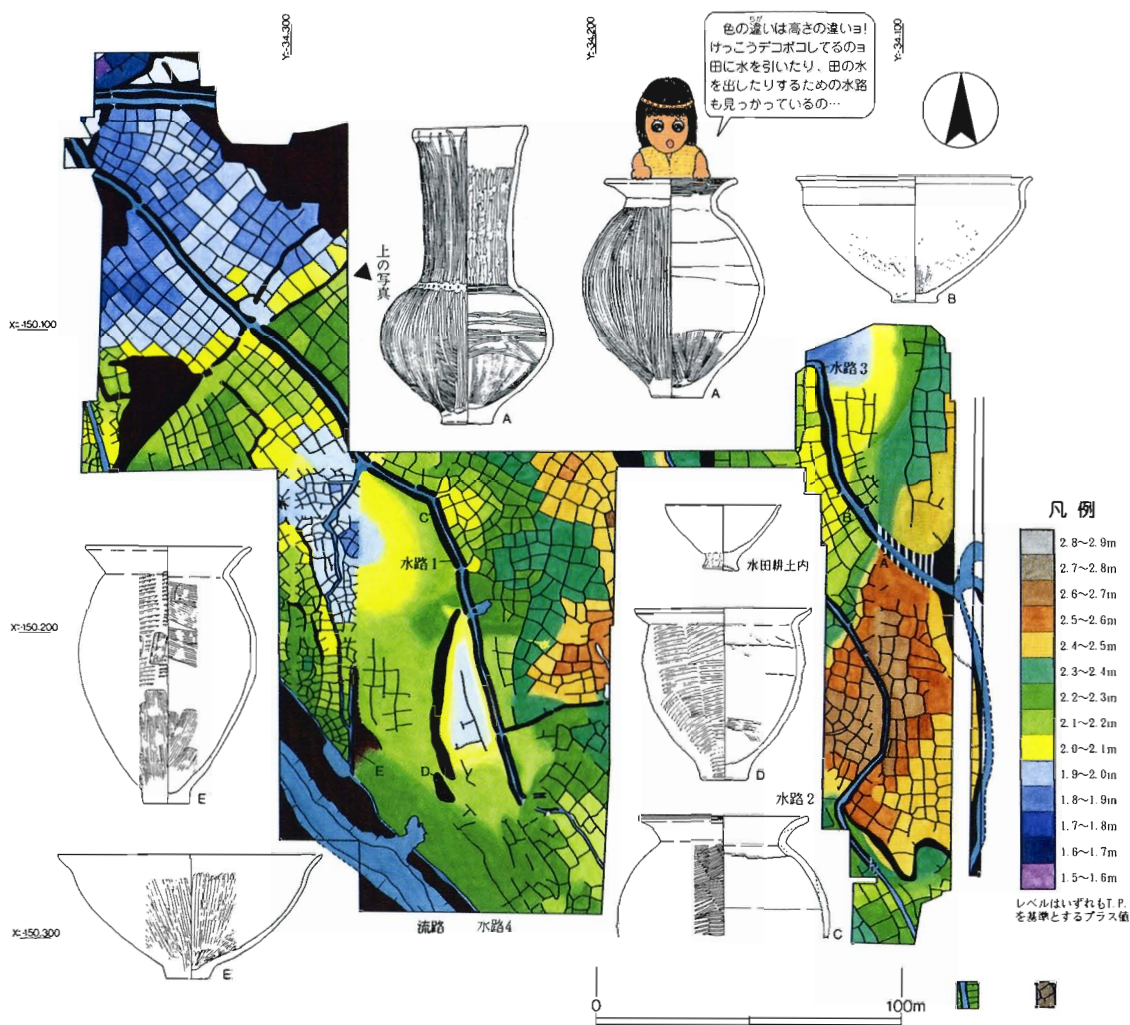
1800年前ごろの水田

やよいじだい
弥生時代の田んぼは下の図や左
の写真のように非常に小さな田ん
ぼがあつまって作られています。

ぜんたい たい
全体を平らにして大きな田んぼ
を作ることなく、とち土地のデコボコ
に合わせた小さな田んぼを作るの
がこの時代の特徴です。

きかい な じだい のうさ
機械の無い時代ですから、農作
業はひとたちムラの人達の共同作業だった
のでしょう。

やよいじだい すいでん
弥生時代の水田



池島・福万寺遺跡（福万寺Ⅰ期）小区画水田面（弥生時代—1800年前ごろ）

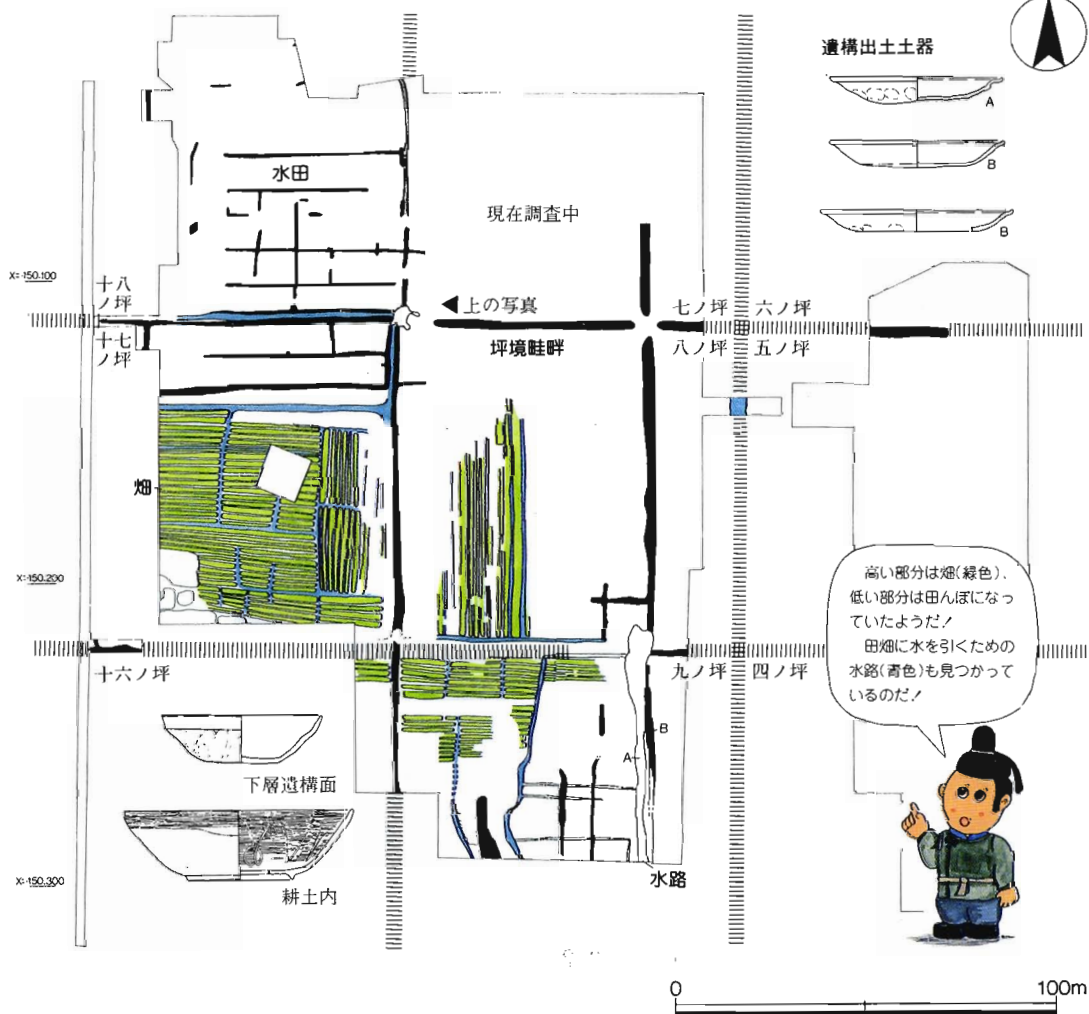
左ページの弥生時代の水田に対して、飛鳥・奈良時代ころになると国の制度が整えられ、それにあわせて田んぼの形も変わってきます。

写真や図のように東西南北の四角い大きな田んぼが作られるようになり（条里制）、その形は現在まで生きつづけています。ここでは平安時代の荘園開発に関係して条里型の田んぼが作られます。



1000年前ころの水田

平安時代の田畑

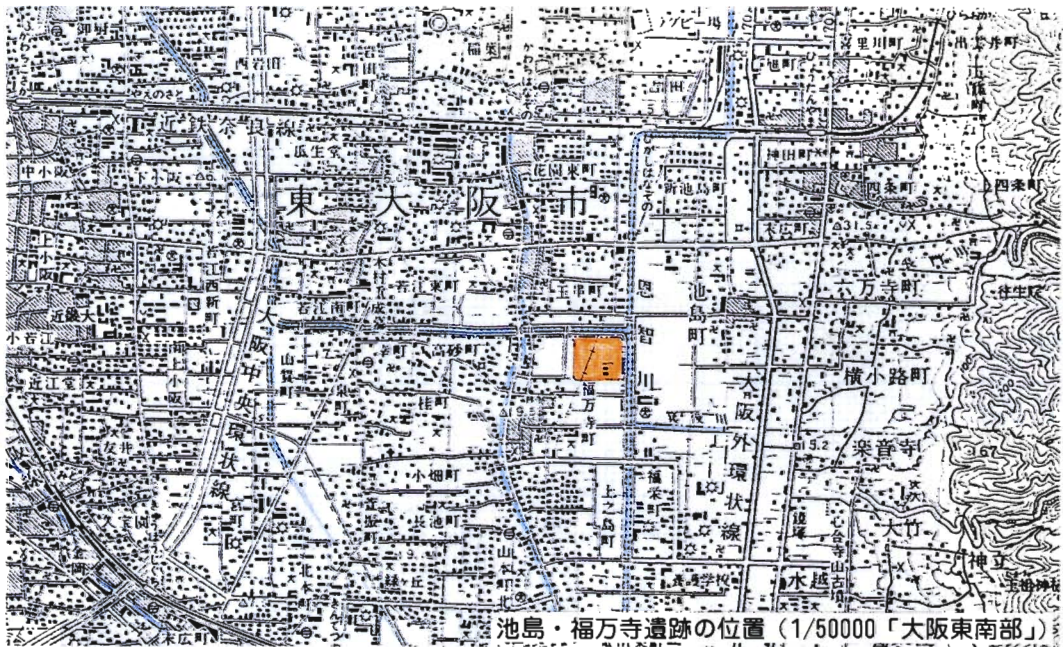


池島・福万寺遺跡(福万寺Ⅰ期)条里型水田面(平安時代—1000年前ころ)

まとめ

これまでの調査でわかったことを簡単にまとめてみましょう。池島・福万寺遺跡では弥生時代から現代まで、人々が洪水とたたかいながら水田や畑で農作物をつくってきました。ところが古墳時代から平安時代の間は大きな洪水がなかったようで、古墳時代にはここにムラがつくられます。このムラには堅穴住居と掘立柱建物と両方が建てられていました。また一度に全部の家が建てられたのではなく少しずつ場所を変えて建てかえられたようです。これらの家のまわりや井戸の中からはたくさんの土器が出土しました。その中でも特に須恵器の器台の破片や土師器の移動式カマドの破片が多くみつかったことはこのムラの特徴としてあげられます。またこのムラからは滑石という石を加工した多くの石製品が出土しました。そのうち白玉と呼ばれる小さい玉はこれまで4000個以上がみつかっていて、製作途中のものもあることからこのムラで作られていたものと考えられます。ただ子持ち勾玉や紡錘車などはこのムラで作られていたというよりは何かお祭りに使われていたものと思われます。水晶の玉が出土していることからもうやら古墳に関係したお祭りであったと考えてよいでしょう。

これから調査が進んでいけばどのようなお祭りをしていたのか、あるいは人々が住んでいた部分と玉を作っていた工場の部分との違いなどがわかってくるかもしれません。



池島・福万寺遺跡 第3回現地説明会資料

1991年9月14日

編集・発行 (財)大阪文化財センター

〒536 大阪市城東区蒲生2丁目10-28

TEL 06-934-6651

印刷

株式会社 中島弘文堂印刷所